

緑色の時計

小川未明

青空文庫

おじさんの髪かみは、いつもきれいでした。そして、花畑はなばたけでも通とおつてきたように、着物きものは、いいにおいがしました。そわそわといそがしそうに、これから、汽車きしゃに乗のつて、旅たびへでもかけるときか、あるいは、どこか遠とおくから、いま、汽車きしゃでついたばかりのように、その目めはいきいきとしていました。

事実じじつ、おじさんは、方々ほうぼうへでかけたし、ぼくたちの知しらない町まちで、めずらしいものを見みたり、いろいろの人々ひとびととあつて、聞きいたおもしろい話はなしを、ぼくたち兄弟きょうだいにしてくれたのでした。

ある日ひのこと、

「ぼく、望遠鏡ぼうえんきょうが、ほしいな。」といったのです。すると、

おじさんが、

「じゃ、いい望遠鏡ぼうえんきょうを、さがしてやろうかな。」といいました。

「遠くとおが、見えるんだよ。」

「船乗ふなのりが、持つもつようなのさ。」

「そんなの、あつても、高たかいだろう。」

「なに、出でものなら、たいしたことことはない。」

こんなぐあいに、おじさんの口くちから聞きくと、なんとなく、はや、自分じぶんは、のぞみを達たつしたもののようように、うれしくなるのでした。

また、ある日ひのことでした。弟おとうとが、

「どこかに、スケートのくつが、ないもんかな。」と、思おもいだし

たように、いいました。

「なに、きみは、スケートができるのかい。」と、おじさんが、聞きました。

「おけいこをしたいんだよ。」

「そんなら、エスまち S 町の夜店よみせへいってごらん。あのへんには、外がいじ人の家族かぞくが、たくさんきているから、出でないともかぎらない。」

まったく、雲くもをつかむような話はなしなのだけれど、おじさんのいうことを聞くと、なんとなく、そうかもしれないおもと思うのです。

「エスまち S 町へいってみるかな。」と、弟おとうとが、いいました。すると、

おじさんが、

「この時計とけいも、あすこの露店ろてんで買かったのだ。スイス製せいのなかなか

正確なやつで。」と、おじさんは、時計をうでからはずして、ぼくたちに見せました。

ぼくは、まえから、いい時計だなど思っていたのでした。形がめずらしく、長方形をして、緑色のガラスが、はまっています。手にとってみるのは、はじめてだけれど、するどい、ぜんまいの音が、チツ、チツとしています。

「ほかに、いいのを見つけたら、これを正ちゃんにあげるよ。」と、おじさんは、わらいながらぼくの顔を見ました。ぼくには、思いがけないことだったので、

「ほんとう？」と、聞きかえしました。

「ほんとうとも。だが、すぐではないよ。いいのを見つけてから

だぜ。」と、おじさんは、いいました。

あとで、このことをねえさんに話すと、

「そんなこと、あてにしないほうがいいわ。」と、ねえさんは答えて、せつかくのぼくのよろこびをうちけしました。

「じゃ、うそだというの。」と、ぼくは、ねえさんにせまりました。

「だって、あの人のいうことは、いつもゆめののような話じゃないの。」

そういわれれば、そんなような気もするけれど、ぼくは、おじさんの話には、いつもひきつけられるのでした。

「正ちゃんしょうちゃんは、うそをつくような人ひとでもすき？」と、ねえさんが、

聞ききました。

「ぼく、うそをつくような人は、大きらいだよ。」

ほんとうをいえば、ねえさんも、ぼくも、真におじさんが、まだわからなかったのです。

春風はるかぜの吹くふく、あたたかな晩ばんがたでした。弟は、S町エスマチの露店ろてん

へ、いつしよにいつてくれというのでした。二人は、電車でんしゃに乗つて、でかけることになりました。駅えきの近くちかの花屋はなやでは、花はなの咲さいている、ヒヤシンスの鉢はちが、ならべてありました。

おとうと、電車でんしゃの窓まどから、外そとをのぞいて、

「にいちゃん、いなかのようなところを、通とおるんだね。」といいました。ぼくは、つりにいくとき、よくこのあたりを歩あるいたけれ

ど、弟は、いままで、こちらへきたことはなかったのです。

エスまち

S 町へつくと、もう暗くなりかけていました。大通りには、

あかりが、ちかちかについて、お祭りでもあるようでした。なるほど、たくさん露店が出ていました。けれど、一つ、一つ、見ていくけれど、子どものおもちやとか、日用品とか、食べ物のようなものばかりで、望遠鏡や、時計のようなものを売る店は、見つかりませんでした。まれに、お勝手道具や農具などをならべたものがあつたけれど、スケートのくつをおくような店は、見つかりませんでした。

ぼくのさきになつて、歩いてきた弟が、ふいに、

「にいさん。」と、ぼくをよびました。ぼくは、いそいで、弟に

追おいつきました。

ちようど、露店ろてんのおわりかけたところに、古ふるぐつや古ふるげたをむしろの上うへへつみあげた店みせがありました。弟おとうとは、その前まえへ立たつて、ねっしんに見みていました。が、小ちいさな声こえで、

「ちよつと、あのおばあさんの手てをごらん。」というのでした。

うす暗くらい、かたすみのところに、みすばらしい年としとつたおばあさんが、かたちんばの古ふるげたをよりわけて、あれか、これかと、くみあわせてみているのでした。おばあさんは、そのことに、まったたくむちゆうでした。そしてつめをいためたのか、指ゆびさきから、赤あかく血ちがながれていました。これを見みたとき、さすがに、ぼくは、世間せけんには、こんな生せい活かつもあるのかと考かんえられて、なんとなくい

たたまらない気持ちきもがしました。

「さあ、もう帰かえろうよ。」と、ぼくは、弟おとうとをうながして、二人ふたりは、

さつききたときの道みちをもどつたのであります。

星ほしの光ひかりが、うるんで見みえる晩ばんでした。家いえへつくと、つかれて、

がっかりしました。

「おじさんは、うそつきだね。」と、弟おとうとは、憤ふん慨がいしました。

「あの、S町エスマチで、なかつたかもしれぬよ。」と、ぼくが、い

いました。

「どうして。」と、弟おとうとは、いぶかしそうに、問といかえました。

「だって、あのあたりに、外がい国こく人じんなんか、いそうもないじやな

いか。」

そう、ぼくが、いうと、なるほどそうだねと、いわぬばかりに、
弟は、^{おとうと}頭を^{あたま}かしながら、

「こんど、おじさんがきたら、よく聞いてみようね。」といいま
した。

そののち、どうしたのか、しばらくおじさんは、見^みえませんでした。
ある日^ひのこと、とつぜんおじさんが、病^{びょう}院^{いん}でなくな
れたという知^しらせがありました。これを聞^きいて、みんなが、どん
なにおどろいたかしれません。

「まあ、あのおわかさで、なんのご病^{びょう}気^{うき}でしたでしょう。」と、
おかあさんは、なみだぐまれました。

「いつも、ほがらかな、方^{かた}でしたのに。」と、ねえさんが、いい

ました。

「あれで、なかなか考えぶかいところがあつて、将来のある人と思つていたのに。」と、おとうさんは、おしまれました。

おとむらいの日には、おとうさんが、いかれました。ぼくは、そのとき、往來で遊んでいて、いまごろ、おじさんのたましいは、天へのぼるのだらうと、まるやかに、よく晴れわたる空をあおぐと、めずらしい金色の雲が、いくつとなく、あちこちに飛んでいました。

「いいおじさんだつたがなあ。」と、ぼくは、もう二度とあわれぬのをふかくかなしみました。

家では、とうぎ、よくおじさんの、うわさがでました。

「いい人だひとったけれど、あんまり話はなしがちようしよくて、信用しんようがされなかつた。」という意見いけんもありました。そんなやさきへ、小さなはこが、おじさんの遺族いぞくから、ぼくのところへとどけられたのです。さつそくあけてみると、いつか、おじさんが、ぼくにやくそくをした、緑みどりいろ色のガラスのはまった、長方形ちようほうけいの時計とけいでした。

これを、おじさんが、ぼくにやつてくれといいのこされたというのです。このことは、みんなを感激かんげきさせました。

「ごらん、おじさんは、うそつきでないじゃないか。」

ぼくは、みんなの前まえでいばりました。そして、このとき、まごころというものが、いかにとうといものであるかを知しりました。

また、日ひがたつにつれて、その人ひとにたいする尊敬そんけいの、だんだんたかまるのがわかりました。

いま、ぼくのつくえの上うへに、おいてある時計とけいがそれです。カチ、カチと、時ときをきぎむ音おとがしています。それを聞きくと、

「きみには、わたくしの心こころがわかってもらえる。」と、おじさんが、いつているようです。そして、たえず、かたわらで、ぼくをばげましてくれるのでした。

「みんなをよろこばせ、みんなをしあわせにするために。」
そうだ、ぼくが、美うつくしい詩しを書かき、りっぱな発はつめい明か家かとなつたとき、おじさんのたましいは、よろこんでくれるだろうと思おもいました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「みどり色の時計」新子供社

1950（昭和25）年4月

初出：「幼年ブック」

1948（昭和23）年6月

※表題は底本では、「緑色《みどりいろ》の時計《とけい》」となっています。

※初出時の表題は「みどり色の時計」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2020年2月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

緑色の時計

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>